

< 沼 津 >

山 鹿 文 庫 に つ い て

べらぼーなぐるうぽから 戸 駒 恒 世

山鹿泰治の生涯 向 井 孝

報告・石川文庫 (べらぼうな通信より)

べらぼーなぐるうぽから

〈個人日誌的に。。。〉

戸 駒 恒 世

一九七〇年十二月某日、山鹿泰治、数年来の闘病の末エスペラントとアナキズムに奔走した生涯に終止符を打った。

翌年二月十一日、東京・水道橋の全通会館に追悼会が開催される。エスペランティスト・アナキスト九〇名が参集。

翌十二月、千葉・中山町の山鹿宅に前日の参加者の他、向井孝が個人紙『イオム通信』で呼びかけた者十名程が集まり、山鹿の蔵書・文献の第一回目の整理が行なわれた。

ダンボール箱と書棚に無雑作に積まれた書籍・雑誌・新聞・ピラの類は、古本屋に値踏みさせれば二束三文にしかないだろう。それらの文献は通常蔵書整理と称して行なわれるような珍本・奇本・高価本の類では決してない。にもかかわらずそれらの文献が光って見えたのは、主に山鹿が彼の運動の軌跡のようにして残したものであったからだろう。

集まった人の殆んどは山鹿がどのような人物であったか、どのような事をしてきた人かさえ知らないし、生前の山鹿との面識などは向井の他には一、二名しかない。

カード作り、目録作り、新聞整理等のこまごまとした作業は一日で飽きる程に退屈だったが、蔵書の傾向、生活技術の豊富さなどによって除々に山鹿の人となりがわかり、作業自体の退屈さも

少しずつとれてきた。それにも増して文献整理の合宿が十名程の常時参加者をつくってきたのは、向井が、自由連合の基礎と呼ぶところの参加者各個の人間関係の深化、転化の意識的な追求にあった。

このようにして進められてきた作業の中で確かに僕らの前に向き合ってくる何ものかを感じることが出来たかどうかは、ひとえにその関わり方の中にあるといえる。

それは、作業とその間の雑談の中で各人の中に形造られてゆく山鹿の像によって語られる、エスベラントとアナキズムを不可分一体のものとした山鹿の思想であり、彼が十代後半から挺身してきた日本のエスベラント運動・アナキズム運動の生きいきとした歴史だ。参加した人の殆どはアナキストあるいはエスベランチストであると自称しないけれども、作業の過程では間違いなくアナキズム運動史、エスベラント運動に向い合っているのである。

だから文献整理が完成の域に達するとしたなら、それはこの運動史を現実の運動にフィードバックさせてゆく作業としてはないだろうか。

今からやっと整理→整理・研究の方向へ向かってゆくのだから作業はまだまだ入口に届いたばかりだ。これは今年の五月から始まった石川三四郎の蔵書整理においても同様であると思うし、通信、発行も勿論この一連の作業となつてゆくだろう。

※ 山鹿文庫

静岡県沼津市内浦五九九の一 瀬川方

石川文庫第一回整理報告記 (六・三三―二四)

六月二三日正午、上北沢駅に三名到着、と実に平淡な書き出しで始まる報告なのだが、実をいうともうそれほど覚えていない。翌二四日、帰りぎわに「せめて原稿用紙一枚でも参加鹿想記を送って下さい」と、つぶらなひとみに涙を浮べて懇願したのだが、その甲斐もなく、みたびこの紙面は私の独壇場となり果てた(：と愚痴はここまで！)

初日は参加人員十八名半。昼食(ラーメン)を食べながらの自己紹介。はじめたときは七名ほどで快適だったが、この間に続々と登場し少々過密気味。三時頃より、あたらしい蔵書カードの記入方法などの説明があり、続いて実作業に入る。

石川文庫(と仮りに名付ける)の蔵書類は約二千冊。その三割ほどを洋書(主にフランス語、英語)が占め、思想、運動関係が三割、東洋史関係、古代史関係(漢籍を含む)が三割、文学書が一割という内容になる。この他にパンフ、新聞類が、現在目を逸しただけでも段ボールに五つはある。だからかなり長い整理作業になることはたしかだ。…略…(戸駒・記)

石川三四郎の蔵書の整理が、向井さんが中心となつて進めている。第三回目は九月二日・二三日に行なわれた。参加希望者は向井孝(姫路市亀山三五四)まで連絡を。

× × ×

△山鹿文庫▽

——山鹿さんとの関わり

向 井 孝

七〇年十二月六日午前五時、山鹿さんは亡くなられた。七八才。故人の遺志で、遺体は無宗教・無儀式で順天堂病院に、学術解剖のため引き取られ、骨ひとつのこさない簡素さで、生前主張の通りこの地上から消えた。

○ 七月三〇日、午後。

山鹿さんはベットに、すっかりやせて小さくよこたわっておられた。言葉はもうほとんど聞きとれず、半分は推量で、「……ですか」と問いかえすとうなずかれるのだった。こちらからの話は、よくわかられたが、応えのない会話はとぎれ勝ちで、どうしようもない思いで宙をとんだ。右手だけが、ほんのすこしきく。それを大きくうごかす。体を左へ傾けてほしいという合図とわかった。「こう……ですか」二、三分して戻す。それをくりかえし求められた。(十年の間、病床にありながら、褥瘡がなかったのは、看護もさりながら、この山鹿さんの細かい気づきぶり——体をうごかすことにあったのだろう)。手を差し入れると、腰の下が汗ばんでぬれていた。その生あたたかい湿り気が指先きに沁みとおるようだった。肌着の着がえをした。抱きあげると、思いのほか重か

った。——死んだ妻のあの軽さをその時まで何となく考えていて、びっくりした。それから、こんな重さならまだ……と思った。

おわかれのあいさつに手をにぎると、思いがけぬ強い握りかえしが来た。のぞきこんだほくの眼をとらえて、まばたきもせず、じいっと放さねい。叱られ詰問されるようだった。表へ出ると、もうこれで生きてお会いできぬかもしれない、と思った。顔を空にむけて、よっぱらいのように、よろめき歩いた。

○ 十一月二三日。

玉川信明さんと一緒におたずねした。「たそがれ日記」を編集し、若干の解説や評伝をつけて、上梓先をさがし、本にする、そのお許しを得るためであった。病状は七月とあまり変りなかった。むしろ、こちらが要件をいったり、質問すると、はっきり是非を表明された。「祖先は山鹿素行だということを聞いたことがありますか……？」という、奥さんの横からの説明に強く腕をふって「デタラメだ」と言われた。「中国の大同党へは入党されたのですか?」「入党した」……。

夕刻までの数時間、いまからおもえば、この世で最後の出会いとなったひとときを、丁度来ておられた長女・アイノさんをまじえて、うかうかと過したのだった。

× × ×

○ 山鹿さんの生涯は、何よりもエスベラントとアナキズムの二つの運動を不可分一体のものとしてその全身に具現したものだ。エスベラントとアナキズムがこのように全生涯を賭けて切実に結びつき展開されたものを、ぼくらは世界のどこにもみることができない。

○ 山鹿さんは、明治四十年春、家を出て上京、出版社の有楽社にたよった。たまたま有楽社は、創立まもない日本エスベラント協力(JEA)事務所があり、社内講習会でエス語をまなんだ。そしてすぐJEAの無給書記として働きはじめることとなった。山鹿さんの生涯は、ある意味で日本エスベラント運動のはじめから始まるひとつの歴史であった。

○ 大逆事件直後の明治四十四年五月、山鹿さんはJEA会員名簿から住所をさがして大杉栄に手紙を出し、そして密会した。以来、彼はアナキズム運動にすべてを投げうってとびこんだ。日本のアナキズム運動が、国際的交流と連帯をつねに保ちえたその中心の働きの中に、つねに山鹿さんはいた。(山鹿さんが国際的にどの位しられているか！たとえば一度海外へいってきた者は誰でもその大きさにおどろく)とくに中国への、何度も出かけていった、日中アナ交流の仕事は、山鹿さんあつてのことだった。(大杉の国際アナ大会出席の旅券入手は、山鹿さんが渡支して工作したのには有名だ)

○ 印度でWRI(戦争抵抗者インター)世界大会があつた。それに出席して帰日した一九六一年十二月脳出血で半身不随となられた。以降、筆のとれる一九六六年まで、向井の請いにより「たそがれ日記」を書きつづけられた。日記は、全八冊、九一篇、自伝、追想、記録、論説主張、随想そして中国、台湾、比国、印度にわたり、アナキズム運動史、エスベラント運動史にとつても、貴重な資料の宝庫でもある。

「イオム」一〇三号(一九七〇・一二)

六月末の山鹿宅で遺品目録をつくりながら、はじめて手伝いに

来たKさんに、
「山鹿さんて、どんな人や……。もし友人に聞かれたらどう答える……？」

「人間味のある人、奥さんと話していて、そう感じた……」

「人間味？ どんどこころか……」

(またはじまった。イジワリ問いかけが……。とばかりKさんは口ごもって、ウラメシソウな顔)——略——

「君は、山鹿さんて何や、の答えをわかるべく、ここへ来たんや。そして来た瞬間から山鹿さんてどんな人？ Vの答をつくりはじめるのや。そしていま、君がつくってる最初のこたえはこうや」

つまり、山鹿さんとは——いま君が、その遺品の整理・分類目録づくりを手伝っている……。そしてさらに言えば今年一月以来毎月二〜三日づつ六回にわたって、のべて五〜六〇人位が、その作業を共同でやってきた、自分もその仲間の、その対象の人、である。

言いかえれば、山鹿さんをもっとたしかにとらえる視点は、自分との関係Vであり、そこからもっとも確かな山鹿さんとはVがつくられていく。山鹿さんとはVが山つくられていくVという時、それは人君の山鹿さんがつくられていくVであり、君が山鹿さんをつくるのである。——略——

このようにして、ぼくらは山鹿さんの生涯——歴史の中に加わり、またぼくらの生涯の中へ山鹿さんを取り入れる作業をしているというわけなのである。

「イオム」一一一号(一九七二・七)